

(独立行政法人教員研修センター委嘱事業)

## 教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

### 報 告 書

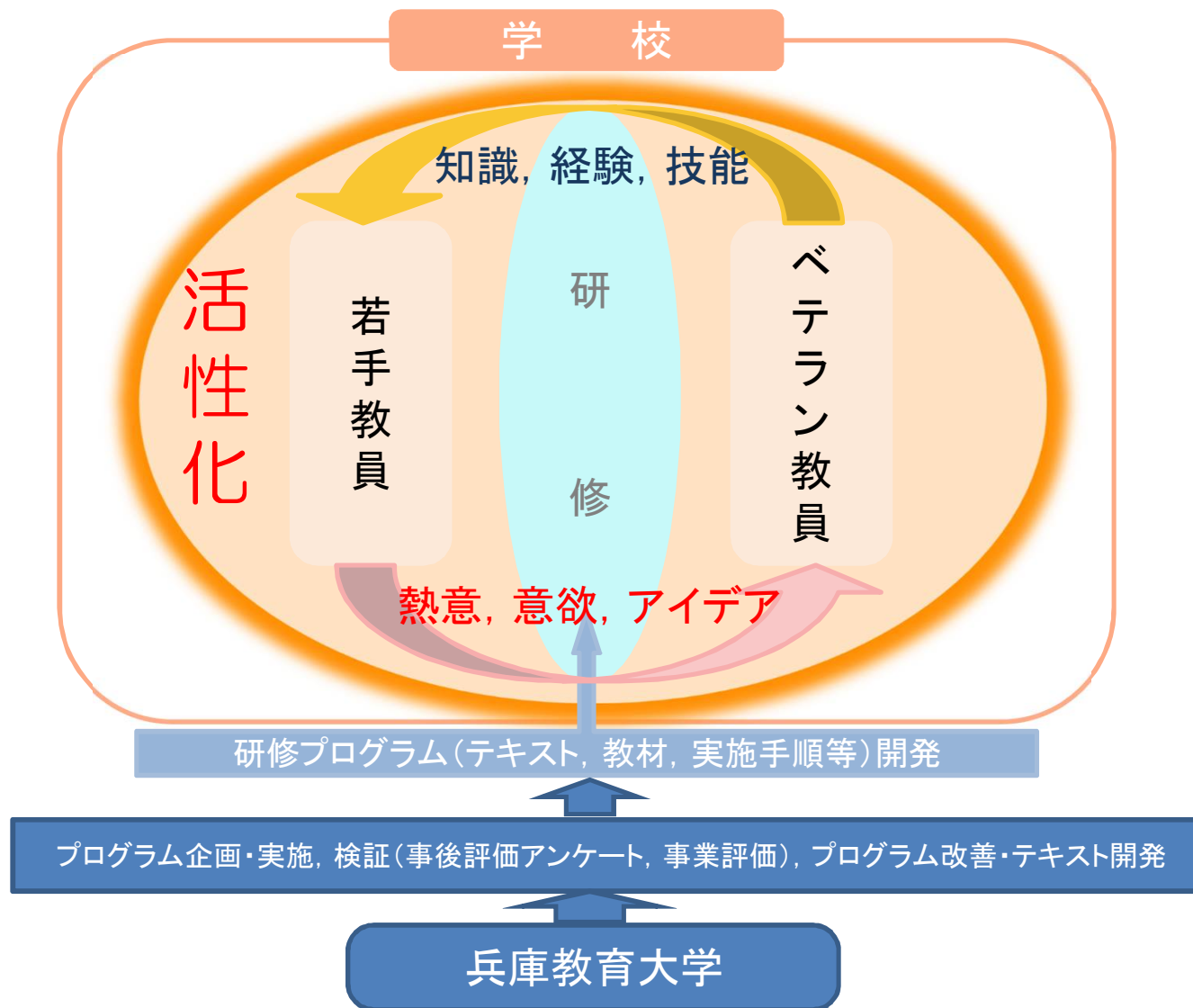
プログラム名	世代間交流を通じた学校の活性化を促す研修プログラムの開発
プログラムの特徴	ベテラン教員の知識や技能を次の世代に伝えると共に、世代間交流を促すプログラムを開発し、それにより学校を活性化しようとするものである。ベテラン教員（50歳代の教諭）を講師として招き、その経験、知識、技能を核とした研修プログラムを開発、実施し、その研修の経験をもとに、各学校で世代間交流による学校の活性化を促すことを目指すものである。それぞれの学校の教職員の年齢構成の実態に応じて、各世代がそれぞれの持ち味を発揮し、その持ち味を生かした学校づくりを目指すところに本プログラムの特徴がある。

平成23年 3 月

兵庫教育大学 兵庫県教育委員会

世代間交流を通じた学校の活性化を促す研修プログラムの開発

概念図



## 平成 22 年度教員研修モデルカリキュラム開発プログラム 実施報告書

### I 開発の目的・方法・組織

#### 1. 開発の目的

若年層の教員が増加傾向にあるとはいえ、教職員の年齢構成は、50 歳代の教員層が厚いものになっている。そうした状況において、50 歳代のベテラン教員の知識や技能が、次の世代になかなか伝えられず、それらが学校づくりに十分に生かされていない実態がある。そこで、ベテラン教員と中堅や若手の教員とが共に研修し、学ぶ機会を充実させることにより、ベテラン教員の知識や技能の伝承が果たされるとともに、各学校における校内研修の場で世代間交流を活発にすることにより、学校づくりの活性化を促すことを目的とした研修プログラムの開発を連携して進めることとした。

#### 2. 開発の方法

研修プログラムの開発は、以下のように行った。

本学の教員が、これまで学部教育や現職教員を対象とした大学院教育において実施してきた授業、あるいは様々な機会において行ってきた研修を素材として活かしながら、本プログラムにおいて目指す世代間交流を活発にし、それにより学校の活性化を促すために必要な研修内容を検討し、原案として作成した。このことは、これまでの経験を点検するという作業となる。また、外部講師としてベテラン教員を招き、研修の中で世代間交流を体験できるように工夫したり、外部講師の勤務校での世代間交流の活性化の実態を事例として学び、研修の参加者が実践に活かすヒントを得られるように工夫したりして、大学教員と学校現場の教員とが共同で研修を実施するという試みを積極的に行った。したがって、事前に十分に打ち合わせを行うなど、ていねいなカリキュラム開発に心がけた。大学教員の専門性を十分に活かした開発を出発点としながら、より実践的な内容となるように学校現場の教員との連携を重視した。

そしてその原案を下記で述べる組織において、外部の関係者から様々な意見を得て、その意見を基に必要な修正を行い、プログラムの原案を完成させた。

次に、実際に研修を行い、その内容の適否について検証を行った。研修場所は、本学（神戸サテライトを含む。）を会場として行ったものと、兵庫県立教育研修所で行ったものがある。検証の方法は、受講者によるアンケートを行い、それを踏まえながら各実施者が成果、課題について自己分析を行った。また、事後アンケートも行い、研修の効果についても検証を行った。そして、その結果を下記の組織に提示し、外部の関係者からの評価も受けた。

以上のようにして、プログラムの開発を行った。

#### 3. 開発の組織

兵庫教育大学では、平成 19 年 3 月に、現職教員の研修を支援するために本学が行う研修事業のプログラムを開発、実施することを目的として、「兵庫教育大学現職教員研修支援プログラム開発プロジェクト」を組織した。このプロジェクトでは、(1) 現職教員研修の教育内容・方法に関すること、(2) 現職教員研修における教育委員会・学校との連携協力に関すること、(3) 現職教員研修の運営体制に関すること、(4) 担当教員の研修（FD）に関すること、(5) その他現職教員研修のプログラム開発に関すること、以上 5 点について研究、開発を行うこととなっている。そのために「研修プログラムチーム」を設置し、本学教員、教育委員会および教育センター等関係者、公私立学校等関係者、学校長会等関係者、本学大学院学校教育研究科修了生、によって組織している。

本事業も、この「研修プログラムチーム」において開発を行ってきた。本学教員が作成した研修内容の原案について検討を行い、主として、学校現場のニーズの観点からプログラム開発のための議論を行った。さらに、研修実施後に会議を開催し、実施状況の報告と反省点、改善点などの議論を行った。また、学内では、「研修プログラムチーム」の委員の他、研修の実施担当者も加えた会合を持ち、研修内容をさらに議論するとともに、実施に向けた実務的な調整を行った。

以上のような組織的な取り組みを通じて、開発を進めていった。

## II 開発の実際とその成果（別紙「実施講座」のとおり）

- (1) ベテラン教員とともに学ぶ特別支援教育—『通常学級の授業づくり』と『個別の指導計画』—  
(宇野宏幸、井澤信三)
- (2) “自分のことば”で語り、聴き合う授業研究—対話による授業リフレクションの体験—  
(宮元博章)
- (3) 子どもと学級をみる目を広げる（秋光恵子）
- (4) “かかわり”から教育を見つめなおす—教育コミュニケーションの理論と実践—  
(渡邊隆信、大関達也)
- (5) 校内研修で伝えたい理科の秘訣カンドコロ（渥美茂明）
- (6) 校内研修の企画と進め方—教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？（竺沙知章）
- (7) 外国語活動の実践研究（1）（吉田達弘、松井千代）
- (8) 外国語活動の実践研究（2）（今井裕之、ソ コウ）
- (9) 外国語活動の実践研究（3）（吉田達弘、Jerry Huang）

## III 大学・教育委員会連携による研修についての考察

### 1. 連携を推進・維持するための要点

連携を推進・維持するためには、まず組織をつくるのが大切である。組織をつくるためには、研修に対する考え方、ねらいなど、基本的な理念について共通理解を図ることが欠かせない。

次に連携を進めていく際に必要なことは、大学と教育委員会とのコミュニケーションを活発にすることである。それは、本プログラムに止まらず、幅広く、日常的に協働して、さまざまな取り組みを行うことを必要とする。それぞれの立場に対する理解を深めて、スムーズに連携できる関係を構築することが欠かせない。

またお互いの立場の理解を深めることは、それぞれの専門性に対する理解を深め、それらを積極的に活かしていくことを促すことになるであろう。教育委員会は、学校現場の問題に即座に役立つ研修課題に取り組む内容を企画する専門性が高いのに対して、大学は、学校現場の問題を読み解き、その背景を理解したり、より本質的に問題を考えたりする研修内容を企画する専門性が高い。また大学は専門的知識も豊富に保有している。両者の専門性のバランスをとることが必要である。

専門性のバランスをとることは、双方が、お互いの専門性を学びあうこと、また追求しようとするテーマについて十分に議論を行い、お互いが新たな知見を得ることができるようになることが必要である。

さらに、連携の基盤といってもよいことであるが、事務組織をつくり、実務的な連絡調整をスムーズに行えるようにすることが重要である。連携には、きめ細かな調整が重要であり、それを担う事務組織の体制を整備することが必要である。例えば、研修を実施する際の受講者数の確認や研修の準備物の確認など、事前に事務的な連絡調整を密にしていくことが大切である。

### 2. 連携により得られる利点

大学としては、教育委員会や学校の実践的課題に触れることができる点が最も大きな利点である。直接、当事者と交流することにより、一般的に言われていることの実情を実感として理解することができるからである。そうした経験を重ねることにより、自らの専門的知見をどのように伝えていけばよいのか、より深く考えることができるようになる。学校現場に対する理解度が深まるとともに、教職員に対する研修などの指導力、授業力を向上させることが可能になる。そして、そうした関わりが大学と教育委員会、学校との信頼関係を深めることにつながり、特に教員養成系大学としては、そうした信頼関係は、大学の教育研究、大学運営にとって大きな利点となる。

教育委員会としては、研修の多様化、体系化を大学に任せながら図ることができ、より豊富な研修体系を構築することが可能となることが利点である。特に財政事情が厳しくなりつつある状況の中では、連携による費用の節約にもなり、限られた予算の中でかなり豊富な研修講座を提供できるという

利点が考えられる。少ない予算で、多様性と専門性を備えた体系的な研修を開発していくことにつながると言えるであろう。また大学との連携は、専門的知見を学び、取り入れるよい機会であり、教育委員会の関係者の力量向上にもつながるといふ点も利点としてとらえることができる。

### 3. 今後の課題等

もっとも大きな課題は、研修の受講者にとってはよい職能開発の機会となっているが、それが学校全体になかなか活かしきれないという点である。本事業の事後アンケートにおいては、3分の2程度の受講者が、研修が役立っていると回答している。何らかの成果は上がっていると思われるので、それを学校全体、地域全体に普及させることを促す取り組みが必要である。学校経営の進め方、教育委員会の学校への関わり方、そして学校内外での研修の工夫などによって、取り組んでいくことができると思われる。そうした取り組みと大学と教育委員会が連携してさらに充実させることが課題となる。

## IV その他

### キーワード

世代間交流 学校の活性化 特別支援教育 授業リフレクション 理科の秘訣  
教育コミュニケーション 校内研修 外国語活動の実践研究

### 人数規模，研修日数（回数）

番号	研 修 名	人数規模	研修日数
1	ベテラン教員とともに学ぶ特別支援教育 －『通常学級の授業づくり』と『個別の指導計画』－	A	2
2	“自分のことば”で語り、聴き合う授業研究 －対話による授業リフレクションの体験－	A	1
3	子どもと学級をみる目を広げる	A	2
4	“かかわり”から教育を見つめなおす －教育コミュニケーションの理論と実践－	B	1
5	校内研修で伝えたい理科の秘訣カンドコロ	B	1
6	校内研修の企画と進め方 －教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？	C	1
7	外国語活動の実践研究（1）	C	1
8	外国語活動の実践研究（2）	C	1
9	外国語活動の実践研究（3）	B	1

（備考）

人数規模：A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上  
研修日数：A. 1日以内 B. 2～3日 C. 4～10日 D. 11日以上

### 【問い合わせ先】

国立大学法人 兵庫教育大学  
総務部企画課 広報・社会連携事務室  
〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1  
TEL 0795-44-2053

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

【報告書】

開発の実際とその成果

1. 「ベテラン教員とともに学ぶ特別支援教育

－『通常学級の授業づくり』と『個別の指導計画』－」講座

○ 研修の背景やねらい

特別支援教育では、従来の特殊教育（障害児教育）の対象となる障害のある児童生徒に加えて、発達障害（LD, ADHD, 高機能自閉症・アスペルガー障害等）のある児童・生徒への個に応じた教育・支援の充実を目指している。発達障害のある児童生徒は、知的障害を伴わないことから、通常の学級に在籍することが多い。

今回の研修講座では、特別支援教育の質的向上を目指していく上で、大切なポイントとして、①発達障害の児童生徒が在籍する通常学級における授業づくりのあり方、②個別の指導計画のバージョンアップ、を取り上げる。①については、発達障害の児童・生徒が在籍することを前提とし、発達障害のある子どもへの視点を重視した授業・学級づくりについて講義・演習を行う。②については、特別支援教育では「個別の指導計画」を作成することが求められてはいるが、まだ作ることが目的となっている部分もある。個別の指導計画を児童生徒にとって意義のあるものにするためのバージョンアップをねらいとした演習・情報交換を行う。さらに、今回の研修講座では、これまで学校現場において特別支援教育に長年取り組んできた先生に講義・演習に参加いただき、ベテラン教員が培ってきた実践知の紹介をもとにディスカッションを行い、ともに学べる機会にしたい。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：通常学級・特別支援学級、特別支援学校の教員

人 数：7人

期 間：平成22年8月23日（月）～ 24日（火）2日間

会 場：兵庫教育大学加東キャンパス

講 師：宇野 宏幸教授、井澤 信三准教授

今津 恵教諭（加古川市立平岡小学校）

井上 和久教諭（兵庫県立赤穂特別支援学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

本研修では、基本的にベテラン教員による講義と質疑応答（午前）と演習（午後）を組み合わせた2日間を構成した。1日目のテーマが「通常学級における授業づくり」、2日目のテーマが「個別の指導計画のバージョンアップ」を設定した。演習・ディスカッションに多くの時間（各日で3時間）を配分するように配置した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
ベテラン教員に学ぶ「通常学級の授業づくり」	2時間	発達障害の児童生徒が在籍することを前提とする授業・学級づくりの工夫を理解する。	内容：小学校・中学校における通常学級での授業における特別支援教育の視点の持ち方を解説し、どのように授業づくりを試みているか実践例を紹介する。それをもとに、受講者によるディスカッションを行う。形態：講義、使用教材：プレゼンテーション・ソフトを用いた講義。

特別支援教育のための授業研究の仕方	3時間	発達障害の児童生徒が在籍することを前提とする授業研究の仕方を理解する。	内容：実際の通常学級における授業を撮影した映像をもとに、授業における検討すべき視点(教師の動き、児童生徒の反応、学級全体の動きなど)を明示していくとともに、受講生による主体的な授業評価を試みる。形態：演習、使用教材：情報処理室におけるパソコンによる映像を共有する。
ベテラン教員に学ぶ「個別の指導計画」	2時間	個別の指導計画を作成する制度的・実質的な概要を理解する。	内容：特別支援教育では個に応じた指導を実現するためのツールとして「個別の指導計画」がある。子どもの実態把握から指導実践を効果的なものにするためには、「個別の指導計画」をどのように作成・活用していくのか、実践例の紹介を通して解説する。それをもとに受講者によるディスカッションを行う。形態：講義、使用教材：プレゼンテーション・ソフトを用いた講義。
個別の指導計画のバージョンアップ	3時間	個別の指導計画に関して、意見交換を行い、各受講生の改善点を学ぶ。	内容：各受講生が、実際に作成し、活用している個別の指導計画を1つ持ち寄り、それぞれの良さや修正点を明らかにし、他の受講生の「個別の指導計画」をも参考にしながら、理想的な指導計画のあり方をディスカッションし、すでに作成し活用している「個別の指導計画」の具体的な改善(バージョンアップ)を行う。形態：演習、使用教材：各受講生が持参した個別の指導計画。

○ 実施上の留意事項

本研修では、ベテラン教員および多様な参加者による意見交換に基づき、学校現場において抱える課題を解決するための基礎知識と応用的な力を獲得できるように研修内容にするため、2日間にわたり、十分な時間を確保し、演習に相当時間数をあてるようにしている。「特別支援教育の授業研究」では、発達障害のある児童が通常学級での授業において、先生と当該児童とにおいて、どのような相互作用が生じているかを把握した上で、先生に求められる適切な指示・援助・支援のポイントを焦点化した。個別の指導計画バージョンアップでは、「①誰が、いつ、作成しているか(作成の手続き)、②書式について(盛り込むべき内容)、③学校内の引き継ぎ等での使われ方(活用の仕方)、④保護者の参加の仕方、⑤管理の仕方(個人情報の保護)、⑥個別の指導計画と個別の教育支援計画」をディスカッションのポイントとした。

○ 研修の評価方法、評価結果

研修会実施後に、受講生に対するアンケートを実施した。研修全体への評価としては、おおむね良好な評価であった。特に、今回の研修ポイントであった「ベテラン教員」の研修への参加は、異世代教員との交流として意義あるといった高い評価を得ることができた。

○ 研修実施上の課題

本研修会は、主に10年目研修に当該する教員を対象としている点では、参加者もおおむねそのような傾向であった。一方、学校種は、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校など、多様であったため、お互いの現状を知る上では、プラスに働いた点があるものの、同じ状況における具体的な解決についての深まりが少し不足した可能性がある。今後、受講生の絞り込み等について、検討する必要がある。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム開発プログラム**

【報告書】

**開発の実際とその成果**

2. 「“自分のことば”で語り、聴き合う授業研究

－対話による授業リフレクションの体験－ 講座

○ 研修の背景やねらい

学校現場がますます多忙となり、教師達が自らの授業について語り合う中で技量を高め合っていくような機会が少なくなっている昨今、授業で起こっていた子どもたちの事実と教師のねがい・思いを聴き手と語り合い、その中で語り手、聴き手双方が自己の授業を支えている授業観や実践知についての「気づき」を得て、授業を変革・創造していく。このような、授業者が主体となり、他者との対話によってなされる「授業リフレクション」と呼ばれる授業研究のスタイルが近年注目を集めている。本研修では、授業リフレクションの背景やねらいを紹介すると共に、その技法の一つ（カード構造化法）を実際に体験し、教師同士が一つの授業場面について語り－聴き合うことの楽しさと意義を実感してもらい、現場での授業研究の変革と同僚性構築のための手がかりを提供することを目的とする。

○ 対象, 人数, 期間, 会場, 講師

対 象：小・中学校教員

人 数：8人

期 間：平成 22 年 8 月 24 日（火）

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：宮元 博章講師

大向 勲教諭（三田市立小野小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

今回の研修ではあくまで実習による「体験」を主目的とするので、理論的な解説は実習する上で必要最小限の事項にとどめる。実習については欲張って内容を詰め込まず、少数の事柄を融通を利かせられるように時間的に余裕をもって配置する。時間的に余裕が出た場合は、自由な意見交流の時間を長く当てる。

○ 各研修項目の内容, 実施形態（講義・演習・協議等）, 時間数, 使用教材, 進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容, 形態, 使用教材, 進め方等
導入・解説	2 時間	授業リフレクションの意味と目的, 理論的背景について概説すると共に, 授業リフレクションの一技法で, 今回の実習として使う「カード構造化法」について手順に沿って具体的に説明する。	<p>&lt;内容&gt;            授業リフレクションについての概説。授業リフレクションの一技法であり, 本研修で体験する「カード構造化法」についての解説</p> <p>&lt;実施形態&gt;            講義</p> <p>&lt;使用教材&gt;            ・ 配付資料（オリジナルに作成, ただし一部に・刊行物からのコピーを含む）            ・ DVD（オリジナルに作成）            ・ カード構造化の産出物の例（オリジナル）</p> <p>&lt;進め方&gt;            ①講師自己紹介, 受講者自己紹介            ②研修全体の流れの説明</p>



			<p>③実習時のペア作りを兼ねたアイスブレイキング</p> <p>④本研修のテーマである授業リフレクションについての意味, 目的, 背景理論等の説明</p> <p>⑤午後に実習することになるカード構造化法について, 手順に沿って説明</p> <p>&lt;留意点&gt;  授業リフレクションという言葉や内容について初めて聴くということを前提に, その必要性ややり方について, 具体例を交えながらできるだけわかりやすく解説する。</p>
実習	3時間	「カード構造化法」を用いて, ペア毎に語り手と聴き手(プロンプタ)役を体験し, 気づきを交流する。	<p>&lt;内容&gt;  カード構造化法の体験</p> <p>&lt;実施形態&gt;  演習</p> <p>&lt;使用教材&gt;  ・配付資料(オリジナルに作成)  ・DVD(オリジナルに作成)  ・カード, 模造紙, 鉛筆, ペン等の文具</p> <p>&lt;進め方&gt;  ①ビデオで視聴する授業についての概要説明  ②授業場面(約20分)の視聴  ③授業場面を見て見たこと, 考えたこと, 感じたことをカードに書き出し, それを基にツリー図を作成  ④ツリー図を基にペアによる考察(語り手-聴き手の役割を交代して2回)  ⑤授業リフレクションの経験について, ペアで気づきを語り合う  ⑥他のペアのツリー図の鑑賞も含めて, 受講者全体で気づきを交流</p> <p>&lt;留意点&gt;  ツリー図作成時は全体を巡回し, 手順に迷っている人には適宜助言を行う。考察中はあまり介入せずペア間の相互作用に任せる。リフレクションの気づきの交流時には, 様子を見て, こちらからリフレクションのねらいの観点から考察の視点を与える。</p>
まとめ	1時間	本研修の限界を踏まえて, 授業リフレクションの本来の主旨である「自分の授業」の振り返りにつなげるための働きかけを行うと共に, 受講者	<p>&lt;内容&gt;  講師による補足解説と総括</p> <p>&lt;実施形態&gt;  講義</p> <p>&lt;使用教材&gt;  ・配付資料(オリジナルに作成)  ・授業者自身によるカード構造化の産出物(オリジナル)</p>

		<p>の感想を交流し、本研修の意義を確認する。</p>	<p>&lt;進め方&gt;</p> <p>①実習材料に使った授業場面の授業者自身によるカード構造化法による授業リフレクションの産出物を呈示し、解説。また、授業者の授業リフレクション経験についての振り返りの紹介</p> <p>②講師による授業リフレクションについての理論的な面での補則解説や、自身の授業リフレクション体験エピソードについて紹介</p> <p>③受講者からの質疑と講師による応答</p> <p>④本研修についての受講者の感想の交流</p> <p>&lt;留意点&gt;</p> <p>今回の学んだ授業リフレクションの技法を受講者が現場での利用につなげていけるように、実際に利用したときのエピソードを紹介、そこで実感した有用性を強調する。</p>
--	--	-----------------------------	---

- 実施上の留意事項  
上記表中に記載済み

- 研修の評価方法、評価結果

今回の研修の成否については、①こちらが、準備した内容をすべて行うことができたか。②実習中の受講者の取り組みについての観察、③研修最後に受講者に書いてもらい、また述べてもらった感想によって判断した。その結果、事前計画で焦点も「体験」に絞り込んで内容を構成し、時間に余裕を持たせてスケジュールを組んだため、十分に消化することができた。また、実習において説明が不十分だったせいか手順を間違えた受講者も数名いたが、時間内に遅れを取り戻すことができ、実習の中でもメインのパートであるペアでの語りー聴きではみな集中し、かつ楽しく取り組むことができた。そして、受講者の感想では否定的なものではなく、概ね楽しく、気づきを得ることができたこと、新しい概念と技法を学べたことで満足が得られたようであった。現場で試したいとの声も聞くことができた。これらからトータルに見て成功だったと言えよう。

また、本研修では講師の1人としてベテラン現職教員を迎えて行ったものだが、本学大学院在学中にこの授業リフレクション技法を学び、それをテーマとして修論研究を行い、現場復帰後も機会を見つけて授業リフレクションを行っている彼なくしてはこの企画自体が成立せず、実習の手順指導や語り合いのファシリテーション、総括における自らのリフレクション経験を通しての学びに関するエピソード等、経験・知識・技能を十分に活用できたものと言える。「世代間交流」に関しては、本研修の参加者の大半が10年目研修だったこともあり、参加者の中では、世代間交流よりも、むしろ、異校種間の交流（小ー中間）の側面の方が顕著で、かつ、有益だったのではないかと思われる。

- 研修実施上の課題

上でも述べたが、参加者の一部に手順を間違えた人がいたので、今後説明の仕方の改善が必要であるが、そういった手続き上の問題とは別に本研修の構造的な課題がある。それは本来の授業リフレクションは各自の授業を題材に行うものであるが、本研修では見知らぬ他者（教師も子どもも）の1回の授業の一部（約20分間）のみを見ての印象や気づきをカードに書くという変則的なバージョンで行ったことである。もちろん、今回は取りあえず「体験」することを主眼とし、短時間の1回の研修枠内で行うということを考えての選

択であることに加え、逆に通常の個人もしくはペア単位のリフレクションでは得られない  
多人数での研修という設定の利点を活かして、同一の授業を見る教師間でいかに視点が異  
なるかを確認し合うよい機会にもなったので、この形はこの形でよいと考える。今後は、  
研修で体験したことを実践の場で同僚達と試してみる機会をどのように促していけるかを  
課題として考えたい。

### 開発の実際とその成果

#### 3. 「子どもと学級をみる目を広げる」講座

##### ○ 研修の背景やねらい

本研修講座は、世代間交流を通じた学校の活性化を促す研修プログラムの1つとして開発されたものである。近年の学校現場では「子どもが理解できない」といった声がしばしば聞かれ、多くの教師が抱く悩みとなっている。児童・生徒に対する理解不足は学級経営や学習指導の効果を著しく阻害するものであり、児童・生徒理解は教師にとって不可欠のものであると言えよう。

児童・生徒に対する理解を深めるためには、まず教師自身が自らの「子どもをみる目」を客観的に理解することが重要である。なぜならば、教師に限らず人は誰でも「他者に対する自分の視点」には気が付きにくいものであり、児童・生徒をありのままに理解しているつもりでも、自分でも気が付かないうちに先入観や偏りのある見方によって子どもを評価している可能性があるからである。それに加えて、教師が自分自身の「子どもをみる目」を他の教師と共有し合うことも、お互いの「子どもをみる目」を広げることにつながる。特に異なる世代の教師間でそれぞれの「子どもをみる目」の共有を目指して交流することは、児童・生徒理解のための視点のみならず、それを活用した教育実践全般の経験知の伝達にもつながるといえる効果が期待できる。

そこで本研修講座では、教師用RCRTという方法を用いてそれぞれの教師自身が有する「子どもをみる目」の客観的な把握と理解を促進するとともに、異なる世代の教員との交流を組み入れることで、「子どもをみる目」をさらに広げる機会を提供する。児童・生徒や学級に対する自分の視点に気付き、それが児童・生徒と自分自身との関係や学級経営にどのような影響を及ぼしているのかについて理解したうえで、異世代教員の経験知を取り入れたよりよい学級づくりを考えていくことが、本研修講座の目的である。

##### ○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：現在、学級担任をしている小学校、中学校、高等学校の教員

人 数：3人

期 間：平成22年8月23日（月）、25日（水）の2日間

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：秋光 恵子准教授

川元 佳子教諭（加古川市立陵北小学校）

##### ○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

上記のねらいにあるように、本研修講座の主たる目的は教師用RCRTという方法を用いて参加者自身に担任学級の児童・生徒に対して自らが有している視点を客観的に把握させ、ベテラン教員の学級経営の実践を知り、それらを学級経営に活かす手立てを考えてもらうことである。そこで2日間の研修講座全体を4つのセッションに分割し、最初のセッションで教師用RCRTを実施した。第2セッションではグループワークを取り入れながら、子どもに対する教師の視点の特徴についての理解を深める講義を行った。2日目となる第3セッションで教師用RCRTの個別結果をフィードバックし、第4セッションではその結果を元に、参加者各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて参加者相互の討論を中心に検討した。なお結果のフィードバックを2日目に行うのは、参加者ごとに個別の統計的分析とフィードバック用紙の作成を必要とするためでもある。また本研修講座は10年目研修として参加する教員が多いと考えられたため、講師としてベテラン教員を配置して交流が可能となるように配慮した。

##### ○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
ワーク 1	120分	担任学級の子どもに対する自分の視点を把握する①	教師用 R C R T の実施(研修参加者の個別の作業)
講義 1	50分	自分と人との違いや、固定した見方の可能性に気付く	錯視図形や印象形成実験等の心理学的知見を紹介しながら、他者認知の不確かさについて解説(P P を用いて進行)
ワーク 2	60分		・「どんな絵が描けたかな」(グループワーク) ・「いろんな『良い子ども』」(グループワーク)
講義 2	30分	担任学級の子ども	教師用 R C R T の解説(P P を用いて進行)
ワーク 3	80分	に対する自分の視点を把握する②	教師用 R C R T のフィードバックと結果の読み取り(研修参加者の個別の作業に並行して、講師が机間巡視により個別に助言)
ワーク 4	120分	子どもに対する自分の視点と学級経営について考える	各自の学級経営の課題分析と今後の取り組みについて検討(参加者相互の討論を中心に)

○ 実施上の留意事項

教師用 R C R T は参加者各自のペースで実施するが、作業のスピードには参加者ごとに大きな違いがある。そこでこのセッションを午前中におき、昼休憩を挟むことで時間調整を行っている。

○ 研修の評価方法、評価結果

参加者 3 名のうち、2 名から事後アンケートを回収した。事後アンケートにおける「実際の教育実践に生かせる内容だったか」という問いに対する評価は 2 名とも 5 点であり、「全体として期待通りだったか」に対しては 1 名が 4 点、もう 1 名が 5 点と評価した(5 点満点)。したがって、本研修は極めて好評であったと考える。また、「ベテラン教員の経験、知識や技能は役に立つものだったか」に対しては 1 名しか回答がなされていなかったが、その 1 名の評価は 5 点であった。研修中の参加者とベテラン教員の間では活発な意見交換がなされていたことから、参加者にとってベテラン教員との交流は意義深いものであったと考える。なお、「ベテラン教員の知識や技能を伝承するには校内研修が必要か」の問いに対しては 1 名が 3 点、もう 1 名が 5 点と回答した。2 名だけの回答からは結論を下すことはできないが、日々の教育活動を共にしている気心の知れた教員同士での校内研修だけでなく、日常の交流がない教員から知識・技能の伝承を受けることができる校外研修に対しても、様々なメリットが感じられていることが推測されよう。

○ 研修実施上の課題

今年は例年よりも参加者が少数であったが、これは 10 年目研修として参加する教員のために免許状更新講習との兼ね合いを考慮して、8 月末に開催したことが原因と考えられる。少人数であったためにディスカッションが活発になり、参加者の満足度は高められたというメリットもあったが、開催時期については検討が必要と考える。また、今回はベテラン教員が講師として参加した 1 名のみとなったが、講師だけではなく参加者の中に異世代教員が含まれていれば、いっそうの交流の効果が期待できたであろう。この点からも、より多くの教員が参加可能な時期に開催することが望まれる。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム開発プログラム**

【報告書】

**開発の実際とその成果**

4. 「“かかわり”から教育を見つめなおすー教育コミュニケーションの理論と実践ー」講座

○ 研修の背景やねらい

教育の基本は教師ー生徒，生徒ー生徒，教師ー教師といった人間同士のコミュニケーションに求めることができる。本講座では，教育におけるコミュニケーションが，他の社会領域でのコミュニケーションと比べてどこが同じでどこが違うのか，教育場面での望ましいコミュニケーションとはどのようなものなのか，といった問題について，教育学の視点から考察することをねらいとする。教育実践の場面ですぐに使えるコミュニケーションのスキルを習得するばかりでなく，コミュニケーションの基本的問題をじっくりと検討することを通して，日常の仕事のなかではゆっくりと考えることができないような，教育の本質，学びの原点，人間の成長について探求する。

○ 対象，人数，期間，会場，講師

対 象：小・中・高等学校教員

人 数：17人

期 間：平成22年8月26日（木）

会 場：兵庫教育大学神戸サテライト

講 師：渡邊 隆信准教授，大関 達也講師

中津 俊彦元教諭（たつの市学校支援地域本部地域コーディネーター）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

学校教育場面におけるコミュニケーションの様態と背景は多様かつ複雑である。本講座ではまず，元小学校教諭が自らの教職経験をふまえて，対子ども，対保護者，対同僚とのコミュニケーションについて総論的に論じた。その上で，教師ー子どものコミュニケーションに焦点づけながら，「語るー聴く」と「待つ」という2つの観点から，教育コミュニケーションの原理的問題について各論的に考察することにした。

○ 各研修項目の内容，実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容，形態，使用教材，進め方等
オリエンテーション	約50分	講座の目的と進め方の説明	講座の趣旨説明，自己紹介，“カフェ”スタイルによる対話の意義・方法の説明
「教師ー子どもー親」関係の変化	約60分	ベテラン教員の経験談を通して，教師ー子どもー親関係の変化について考察する	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：約30年の教職生活において経験してきた「教師ー子どもー親」関係の変化について検討する</li> <li>・実施形態：講義形式</li> <li>・使用教材：講義資料</li> <li>・進め方の留意事項：受講生の質問に答えながら，「教師ー子どもー親」関係の変化について多様な観点から講述する</li> </ul>
教育コミュニケーションにおける「語るー聴く」	約50分	教師ー生徒の関係を「語る」と「聴く」という観点から考察することを通して，大人中心でもなく，子ども	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：教育的行為を支える三つの関係（権力関係，相互主体的関係，倫理的関係）について検討する</li> <li>・実施形態：講義形式・一部演習</li> <li>・使用教材：講義資料</li> <li>・進め方の留意事項：教育実践場面を想定し</li> </ul>

		中心でもない，双方向的な教育のあり方について考察を深める	て具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに，講義の途中で受講生が議論する機会をもうける
教育コミュニケーションにおいて「待つ」ということ	約50分	子どもの学習活動の指導において教師が待つことの困難性と重要性について理解を深める	<ul style="list-style-type: none"> <li>・内容：近代学校における二つの時間（客観的時間，主観的時間）の相克について歴史的に整理し，主観的時間を充実させるための方策を検討する</li> <li>・実施形態：講義形式・一部演習</li> <li>・使用教材：講義資料</li> <li>・進め方の留意事項：教育実践場面を想定して具体的事例をあげながら理論的な考察を進めるとともに，講義の途中で受講生が議論する機会をもうける</li> </ul>
まとめ	約30分	成果と課題の確認	受講生がワークシートに講座を通して学んだこと，考えたことを記述し，発表する

○ 実施上の留意事項

講師間で事前に2回話し合いをおこなうことにより，講座の目的や方法について共通理解を図った。講座当日は，一人の講師が講義をおこなっているときも他の二人の講師も受講生に混じって講義に参加した。受講生がリラックスして自由に話し合いができるような雰囲気作りを心がけた。

○ 研修の評価方法，評価結果

講座のまとめの時間に，受講生にワークシートを使って講座全体の学びを振り返ってもらった。また，後日，本学所定のアンケート用紙を事務局から受講生に送付してもらい，15名から回答を得た。いずれも，講座全体の評価はおおむね良好であった。

研修の方法については，「（“カフェ”スタイルの）机の形，自由にメモする形がおもしろかった」，「参加型の研修講座だったので，意見を出しあえたり，悩みが話し合えたのでよかった」といった肯定的評価があった一方で，「最初の自己紹介が長く，ワークショップができなかったのが残念だった」，「時間的にゆとりが無かったのが残念でした」といった意見が出された。

ベテラン教員の経験，知識や技能が役立つものだったかというアンケートの質問項目に対しては，15人中12人（80%）が「全くそう思う」か「そう思う」に回答したことから，講座において世代間の交流が効果的におこなわれたと言える。

○ 研修実施上の課題

今回の講座では，ベテラン教員の講話のあとでグループ演習をおこなう予定であったが，時間の都合で実施できなかった。講座全体の内容と方法を考えたときに，1日ではなく2日かけて実施するほうが適当であるように思われる。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム開発プログラム**

【報告書】

**開発の実際とその成果**

5. 「校内研修で伝えたい理科の秘訣カンドコロ」講座

○ 研修の背景やねらい

ベテラン教員が培ってきたノウハウを若手教員に伝える校内研修を念頭に、ベテラン教員が理科野外観察のモデル研修を行います。この研修を通して若手教員自らが研修を組織していく方策を探ります。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：小学校教員  
 人 数：14人  
 期 間：平成22年8月26日（木）  
 会 場：兵庫教育大学加東キャンパス  
 講 師：渥美 茂明教授  
           西山 修教諭（丹波市立春日部小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

西山教諭が、野外学習、とくに自然観察の指導を中心に長年培ってきたノウハウを伝授するとともに、ベテラン教員を巻き込んだ研修をどのように作り上げてきたのか、自身の活動の歴史を振り返りながら、若手教員が自ら学んでいく場を作り出す方策について考えます。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
自己啓発		理科教育に携わる教員間の世代間交流のスキルとは何かを学ぶ	大学で学んだ学問領域の教員に採用された直後の、 <実施形態>講義と討論 <使用教材>西山講師の制作したプレゼン <進め方>教員のキャリア展開を新任・中堅・ベテランの3期に分けて、それぞれの時期に教員として何をどのように学ぶべきか、世代間交流のあり方を講師の体験を軸に展開した。
	40分		新任教師が学ぶことと、新任教員を指導する視点について考え、理想と現実のギャップについて討論した。
	50分		中堅教師が学ぶことと、中堅教員が新任教員に指導できることについて講師の経験を聞いて考えた。
	1時間		ベテラン教師が、新任教員や中堅教員に伝えるべき経験とは何か、それをどのように伝えるか、講師の日常の活動を聞いた後、討論した。



○ 実施上の留意事項

受講生に対して、話題ごとに各自の体験や考えを短い言葉でまとめさせ、意見を聞く機会を設けた。それぞれの経験に応じた発言があり、議論が活発になるように配慮した。

プレゼンのレジュメに添付されたワークシートに、講師の紹介した世代間交流の展開について受講者の意見と、この研修をもとに考えた計画を記入した。

○ 研修の評価方法、評価結果

一連の研修のために用意されたアンケートと、この研修に特化したアンケートの2つを用いて評価するとともに、研修終了後に講師を交えて参加者との意見交流を行った。

1. 西山講師は長年、生き物や岩石・化石などの野外観察を児童に指導するとともに、地域の教員との交流の中で、教材開発や観察指導の研修に力を注いできた。今回の研修では、新任からベテランまで様々な年齢階層の教員を対象に、自らの経験に基づいて世代間交流を通じた力量形成の意義を確認した。参加者は積極的に世代間交流を推し進めることが個々の教員の力量形成に必要な不可欠であることを確認できたことは、本研修の狙いに合致する成果と考える。
2. 実験による教科内容の研修や教材の紹介と運用の研修を希望する意見が聞かれる一方、今回のような自己啓発セミナー的な内容も興味深く、日常の業務を振り返るきっかけとなるとの意見も聞かれた。講義や講演を聴いて、自己啓発につなげる研修の開発も必要であると感じた。
3. 講師を囲んで、形式にとらわれない討議を行う時間を設定できたら良かったと感じた。
4. ベテラン教員の育ちの過程を講師の経験を通して見聞きすることができたのは収穫であった。地域の教員集団の教育力を如何に高めていくかが課題であることも浮き彫りにされた。
5. 新任教員から退職者まで様々な階層の参加者が得られ、一方的に意見を聞くだけでなく、参加者からの提案もあるなど活発な討論が行われ、当初の世代間交流の促進という目的は達成されたと考えられる。

○ 研修実施上の課題

現職教員の中から講師に適する人材を日頃から発掘することが重要であると感じた。また、今回の研修をきっかけに、参加者がどのような活動を行ったか、あるいは既存の学習会などへの積極的な参加につながったかを、時間をおいて調べると良いと感じた。

**開発の実際とその成果**

6. 「校内研修の企画と進め方

－教職員が主体的に参加できる研修をつくるには？－ 講座

○ 研修の背景やねらい

自主的、自律的な学校づくりが求められる中で、そのために必要な職能開発を学校単位で行うことがますます重要となっている。特に、学校における教職員の年齢構成のアンバランスが目立つ傾向にあり、その中で世代間交流をいかに進めて学校づくりを行うかが重要な課題となる。

そこで、教職員が主体的に参加し、その成果が学校づくりに活かされる校内研修とはどのようなものか。世代間交流をどのように進めればよいのか。そのために、校内研修をどのように企画し、運営すればよいのか。以上のような課題に応えることを目指して、校内研修の企画のポイントと研修実施にあたっての工夫について理解を深めることを、本研修はねらいとするものである。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：小・中・高等学校，特別支援学校の研修担当教員

人 数：28 人

期 間：平成 23 年 2 月 25 日（金）

会 場：兵庫県立教育研修所

講 師：竺沙 知章准教授

板倉 史郎教諭（茨木市立玉櫛小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

校内研修についての捉え方を見直し、学校づくりと校内研修との関連を意識させるための講義を行う。研修のねらいを学校の目標、課題と結び付けて企画する必要性を述べる。

小学校教諭より、勤務校の取り組みについて、その背景、考え方と実際に取り組み、工夫したことを報告する。すべての教職員が主体的に参加するための工夫が強調される。

勤務校の実態に応じた、学校づくりを促進するような校内研修計画を作成するという実践的な演習を行う。個人の演習とグループ演習を実施する。課題は二つ。一つは、学校の目標と課題について現状を分析し、それとの関連で研修テーマを考え、シートに記入する。二つ目は、その達成のための研修計画を作成する。

時間配分は、講義 20%、事例紹介 20%、個人演習 20%、グループ演習 40%を目安とする。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等），時間数，使用教材，進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
校内研修の捉え方	40分程度	校内研修の捉え方を深めること	<p>&lt;内容&gt;</p> <p>校内研修の目的、研修の企画と進め方について、学校経営、学校づくりの中に位置づけて捉えることの必要性、その考え方を学ぶ。</p> <p>①研修のねらい、目的の共有化、②達成目標の明確化と検証、③日常の学校経営、教育活動の工夫、④情報収集と情報発信が、そのポイントになる。</p> <p>&lt;実施形態&gt;</p>

			<p>講義</p> <p>&lt;使用教材&gt; 講義資料</p> <p>&lt;進め方&gt; 資料に沿って、講義を進める。</p> <p>&lt;留意点&gt; 学校経営、学校づくりの考え方から校内研修を捉えることの必要性を伝えること。</p>
事例紹介	40分程度	学校で実際に取り組まれた事例を学ぶことにより、校内研修の進め方について理解を深めること	<p>&lt;内容&gt; 校内研修を進めるにあたっての基本的な考え方と実際の進め方について学ぶ。①学校が置かれた状況から校内研修に求められること、②勤務校の取り組みとして、目標－課題－づくり、学校組織－校務分掌－の見直し、具体的研修内容、について事例が紹介された。</p> <p>&lt;使用教材&gt; 講義資料</p> <p>&lt;進め方&gt; 資料に沿って、講義を進める。</p> <p>&lt;留意点&gt; 具体的な進め方だけでなく、その前提となった考え方を伝えること。</p>
勤務校の実態分析と研修テーマの設定	60分程度	勤務校の実態を分析し、取り組むべき課題を明確にすること	<p>&lt;内容&gt; 勤務校の実態を分析して、何が課題となっていて、何に取り組む必要があるかを検討し、それにより、勤務校の重点課題と研修テーマの設定を行う。</p> <p>&lt;実施形態&gt; 演習</p> <p>&lt;使用教材&gt; 講義資料と演習シート</p> <p>&lt;進め方&gt; 各自で勤務校の実態を分析し、重点課題と研修テーマをシートに記入する。それをもとにグループで意見交換を行う。</p> <p>&lt;留意点&gt; 重点化と研修テーマの設定が、具体的に明確になるように、助言を行うことが必要である。勤務校の実態とうまく合致するように、助言することも必要である。</p>
年間研修計画の作成	100分程度	年間研修計画の策定のあり方について理解を深める。	<p>&lt;内容&gt; 重点課題、研修テーマを実現するために、演習シートに従って、勤務校の年間研修計画を策定する演習を行う。</p> <p>&lt;実施形態&gt; 演習</p> <p>&lt;使用教材&gt; 講義資料と演習シート</p>

			<p>&lt;進め方&gt; はじめに，研修計画策定のポイントについて概説し，その後に，各自で演習シートに従って，年間研修計画を策定する。策定後，グループで意見交換を行う。</p> <p>&lt;留意点&gt; 研修テーマ，目標が明確になっているか，教職員が主体的に参画できる工夫がなされているか，体系的な計画が作られているか，成果をチェックできるようになっているか，といった点がポイントとなり，それらに留意しながら，助言を行う必要がある。</p>
--	--	--	--

○ 実施上の留意事項

勤務校の実態を踏まえて研修を行うことが最も重要であることから，受講者に発言を求めたり，グループ演習での発言に耳を傾けたりしながら，実態を把握するように努めることが必要である。マネジメントの力量も必要であることから，各受講者のマネジメント力量の把握にも留意することが必要である。

他の学校，異校種の教員間の交流は有意義であるので，グループをつくる時に留意する必要がある。

○ 研修の評価方法，評価結果

演習シートの作成状況から理解度，研修の成果を把握する。また研修修了時のアンケートにより，成果を把握する。

おおむね研修内容に満足してもらえたと思う。研修計画も形になり，有意義な議論が展開されていたと思う。

ただ校内研修を企画，実施するための具体的な方法の提示を期待していた受講生には，期待はずれの内容だったと思う。

○ 研修実施上の課題

研修講座名やその趣旨から，具体的な方法を学び，すぐにでも活かせる内容を期待している受講者も少なくない。校内研修担当の悩みを抱えて参加している受講者からすれば当然の期待であろう。したがって，受講者が勤務校で実際にどのような苦勞をしているのかを共有化し，その克服策を全体で考えるなど，受講者の日々の悩みを把握しながら，研修を進めることができるように工夫することが必要である。研修の中で，受講者とのコミュニケーションを密にすることが大切である。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

【報告書】

開発の実際とその成果

7. 「外国語活動の実践研究（1）」講座

○ 研修の背景やねらい

小学校5・6年生に外国語活動が導入されることになり、教員は研修等に参加しながら、外国語活動に対する理解を深め、指導技術を磨くことが求められている。一方、高学年の担任を受け持つことが困難に思われるようになってきている昨今、外国語活動の導入によってさらに困難さが増していると聞く。ベテラン教員にとってこのことは深刻な問題で、結果的に、外国語活動の授業は、若手教員が担当するケースが多く目立つ。そこで、本研修講座では、尼崎市立教育総合センターの協力を得て、尼崎市内の若手教員による外国語活動の授業実践を参加者で共有する機会を持つ。その上で、教科や教員の世代を超えて、外国語活動の授業に必要な授業づくりや指導技術を議論する。さらに、体験的なワークショップを提供することで、外国語活動への理解を深める機会としたい。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：（主に）小学校教員（当日の参加者の中には、中・高等学校教員の参加有）

人 数：36人

期 間：平成22年10月8日（金）

会 場：尼崎市立園田東小学校

講 師：吉田 達弘准教授、松井 千代特命准教授

山村 優介教諭（尼崎市立園田東小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

尼崎市教育委員会と共催での開催となる3回シリーズの1回目であるが、各回ともに、尼崎市内の小学校を会場とし、会場校の教員を講師とし、公開授業を実施していただくことにした。授業を観察することで、外国語活動の流れ、子どもや教師の動きを共有した後、授業研究をおこなった。さらに、その日の授業のねらいやテーマに合わせたワークショップを実施し、参加者が体験から気づきを導けるよう配置した。また、授業研究やワークショップでは参加者間の交流が行われるように工夫した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
公開授業	1時間	小学校外国語の授業を共有する。	尼崎市立園田東小学校・山村優介教諭による5年生「クイズ大会をしよう」
授業研究	45分	授業を振り返る。	授業研究の中では、教材や活動づくりについて、文字指導について、小中連携についての質問が出た。吉田が「クイズ」を通してどのようなコミュニケーション活動が生まれるかについて解説した。
ワークショ ップ	45分	授業とリンクした活動を体験し、実際に教室で実施する際の気づきを得る。	ワークショップは、松井が担当した。やり方についてのデモンストレーションを行った後、参加者がグループに分かれて、ピクチャーカードを使い、実際にクイズショーの課題に取り組んだ。活動後、それぞれの気づきを共有した。松井から、活動を考えるためのリソースの情報を提供した。

○ 実施上の留意事項

公開授業，授業研究，ワークショップに一つの流れがでるようにし，観察，体験，振り返り，理解というプロセスを経験してもらえるようにした。また，世代間交流を促すようなグループ活動を取り入れた。

○ 研修の評価方法，評価結果

参加者は30名を超えたが，良い雰囲気の中で研修が進み，参加者の活発な交流が見られた。事後のアンケート結果によると，研修への満足度は，概ね良好であった。また，外国語活動の研修においても，世代間交流の必要性を感じている参加者が多いことがわかった。

○ 研修実施上の課題

公開授業と組み合わせたので，メリットがあった反面，会場校や授業者との連絡が取りにくかった。この点は，尼崎市立教育総合センターの担当指導主事にかなりお世話になった。

(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
**教員研修モデルカリキュラム開発プログラム**

【報告書】

**開発の実際とその成果**

8. 「外国語活動の実践研究（２）」講座

○ 研修の背景やねらい

小学校5・6年生に外国語活動が導入されることになり、教員は研修等に参加しながら、外国語活動に対する理解を深め、指導技術を磨くことが求められている。一方、高学年の担任を受け持つことが困難に思われるようになってきている昨今、外国語活動の導入によってさらに困難さが増していると聞く。ベテラン教員にとってこのことは深刻な問題で、結果的に、外国語活動の授業は、若手教員が担当するケースが多く目立つ。そこで、本研修講座では、尼崎市立教育総合センターの協力を得て、尼崎市内の若手教員による外国語活動の授業実践を参加者で共有する機会を持つ。その上で、教科や教員の世代を超えて、外国語活動の授業に必要な授業づくりや指導技術を議論する。さらに、体験的なワークショップを提供することで、外国語活動への理解を深める機会としたい。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：（主に）小学校教員（当日の参加者の中には、中・高等学校教員の参加有）

人 数：43人

期 間：平成22年12月2日（木）

会 場：尼崎市立塚口小学校

講 師：今井 裕之准教授，ソ コウ特命准教授

手嶋 浩之教諭（尼崎市立塚口小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

尼崎市教育委員会と共催での開催となる3回シリーズの2回目であるが、各回ともに、尼崎市内の小学校を会場とし、会場校の教員を講師とし、公開授業を実施していただくことにした。授業を観察することで、外国語活動の流れ、子どもや教師の動きを共有した後、授業研究をおこなった。さらに、その日の授業のねらいやテーマに合わせたワークショップを実施し、参加者が体験から気づきを導けるよう配置した。また、授業研究やワークショップでは参加者間の交流が行われるように工夫した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
公開授業	1時間	小学校外国語の授業を共有する。	尼崎市立塚口小学校・手嶋浩之教諭による5年生「外来語を知ろう」
授業研究	45分	授業を振り返る。	授業研究の中では、各班が独自のレストランメニューを作り、来客を相手に What do you want? という表現を用いて会話を行う授業について、英語の適切さ、コミュニケーション場面を設定する活動の意義などについて議論された。ソ、今井がそれらの点も含めて、本授業の意義と課題を述べた。
ワークショップ	75分	授業とリンクした活動を体験し、実際に教室で実施する際の気づきを得る。	ワークショップは、ソと今井がティーム・ティーチングの実演も兼ねて担当した。レッスン・テーマの外来語の扱いについて、英語からの外来語ばかりではなく中国語の外来語を取り入れ、その仕組みや面白さについて体験

			<p>的理解を図った。参加者にはグループに分かれて、ピクチャーカードを使い、実際にレストランで中国語や英語を織り交ぜて注文をする課題に取り組んだ。時間の関係で活動途中で切り上げたが、英語以外の外国語を通しての言語や文化の体験的理解の方法を示すことはできた。</p>
--	--	--	--

○ 実施上の留意事項

公開授業，授業研究，ワークショップに一つの流れができるようにテーマの統一を図り，観察，討議，体験，理解というプロセスを経験してもらえるようにした。また，世代間交流を促すようなグループでの討議や活動を取り入れた。

○ 研修の評価方法，評価結果

小中高の教員や校長，教育委員会など参加者の構成が多様であった。それぞれの立場からの主張，特に普段交流が少ない高等学校の校長や教員の発言も多く，交流という点では有意義であった。ワークショップへの参加も積極的であったが，授業研究での討議が白熱したため，活動を最後まで終えることができず課題も残った。事後のアンケート結果によると，研修への満足度はさまざまであった。ワークショップがニーズに合わない場合もあれば，意見交換で互いの相違が顕在化したことなども含め，交流研修活動が確かな成果をあげる過程において不可避な対立や不満もあったように思う。外国語活動の研修において，世代間交流および学校間（小小，小中，小中高）の必要性を感じている教員の参加が少なからずあったことは研修成果であろう。

○ 研修実施上の課題

公開授業担当者が「すべて英語で授業をしようと思ったが，他の先生がたが真似できない授業をしてもしかたがないと考え，日英語を交えて行った」と発言していたように，この研修の目的である教員同士の世代（経験）をこえた交流による相互理解と指導技術の向上に向かおうとする姿勢が感じられた一方，継続的な参加者はごく一部であるため，次回の研修への課題の引き継ぎが難しいことが研修の課題として残ったように思う。



(独立行政法人 教員研修センター委嘱事業)  
教員研修モデルカリキュラム開発プログラム

【報告書】

開発の実際とその成果

9. 「外国語活動の実践研究（3）」講座

○ 研修の背景やねらい

小学校5・6年生に外国語活動が導入されることになり、教員は研修等に参加しながら、外国語活動に対する理解を深め、指導技術を磨くことが求められている。一方、高学年の担任を受け持つことが困難に思われるようになってきている昨今、外国語活動の導入によってさらに困難さが増していると聞く。ベテラン教員にとってこのことは深刻な問題で、結果的に、外国語活動の授業は、若手教員が担当するケースが多く目立つ。そこで、本研修講座では、尼崎市立教育総合センターの協力を得て、尼崎市内の若手教員による外国語活動の授業実践を参加者で共有する機会を持つ。その上で、教科や教員の世代を超えて、外国語活動の授業に必要な授業づくりや指導技術を議論する。さらに、体験的なワークショップを提供することで、外国語活動への理解を深める機会としたい。

○ 対象、人数、期間、会場、講師

対 象：（主に）小学校教員（当日の参加者の中には、中・高等学校教員の参加有）  
人 数：公開授業への参加者 20 名、授業研究・ワークショップへの参加者 10 名  
期 間：平成 23 年 1 月 14 日（金）  
会 場：尼崎市立園田南小学校  
講 師：吉田 達弘准教授、Jerry Huang 特命准教授  
西村 純教諭（尼崎市立園田南小学校）

○ 各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

尼崎市教育委員会と共催での開催となる 3 回シリーズの最終回である。今回の授業は、尼崎市立教育総合センターの外国語活動研究員でもある西村純先生に公開授業を実施していただくことにした。授業を観察することで、外国語活動の流れ、子どもや教師の動きを共有した後、授業研究をおこなった。授業研究では、外国語活動の指導に関してだけでなく、学級経営やクラス集団の関係づくりにまで話が及んだ。さらに、その日の授業のねらいやテーマに合わせたワークショップを実施し、参加者が体験から気づきを導けるよう配置した。また、授業研究やワークショップでは参加者間の交流が行われるように工夫した。

○ 各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目 的	内容、形態、使用教材、進め方等
公開授業	1 時間	小学校外国語の授業を共有する。	尼崎市立園田南小学校・西村純教諭による 6年生「将来の夢を紹介しよう」
授業研究	45分	授業を振り返る。	授業研究の中では、授業者から教材や活動づくりについて説明があった後、参加者（主に中学校教員の出席が多かった）からの質問やコメントが出た。その後、吉田から単元「自分の夢を紹介しよう」の意義や小中連携について解説した。
ワークショ ップ	75分	授業とリンクした活動を体験し、実際に教室で実施する際の気づきを得る。	ワークショップでは、本単元で取り扱ったなりたい職業の表現となりたい理由を述べるという活動を実際に体験した。参加者に、職業名が描かれたピクチャーカードを配付し、その職業につきたい理由をヒントとしたクイズ

			の活動を作ってもらった。その後、他国の小学校でのなりたい職業のランキングなどを紹介し、国際理解的なリソースも提供した。
--	--	--	---

○ 実施上の留意事項

公開授業、授業研究、ワークショップに一つの流れができるようにし、観察、体験、振り返り、理解というプロセスを経験してもらえるようにした。また、世代間交流を促すようなグループ活動を取り入れた。

○ 研修の評価方法、評価結果

授業研究・ワークショップへの参加者は10名で、しかも、小学校籍の参加者が1名であったために、内容的に参加者のニーズを満たしていなかったと思われる。

世代間交流あるいは異校種間交流という意味でも、もっと多数の参加があれば良かった。

○ 研修実施上の課題

当日は、市外で開催された外国語活動の研究会と重なり、十分な参加者を得ることができなかった。今後の日程調整に課題が残った。